哲學研究　第四百五十七號

アベラールの普遍論

横山哲夫

ポルフィリウスは、『イサゴーゲ』の始で、類や種は實在するか、或は、單に思考のうちにのみ存するか、實在するとすると、物體であるか、それとも非物體的なものであるか、非物體的なものであるとすると、可感的なものから分離して存在しているか、或は、可感的なもののうちに存在するか、という三つの問題を提起しながら、これらは入門書の取扱うべきことではないとして、解答を保留している。*『イサゴーゲ』がボエティウスの手によつて飜譯され、これらの問題が初期スコラの辯證論者達に知られるや、彼等は「宛も辯證法の全核心がかかつてそこに存するかの如くに」**全力を集注してその解決を試みた。彼等の下においては、「類や種は實在するか」というポルフィリウスの問題は、「類や種の如き普遍は、res か vox か」という形に置換えられ、普遍は res であるとする實在論と、vox であると主張する唯名論を生み、兩者の對立は、十一世紀末、コンピエーニュのロスラン（Roscelinus Compediensis, Roscelin de Compiègne）によつて唯名論が、シャンポーのギヨーム（Guillaume de Champeaux, Guillelmus Compellensis）によつて實在論が明確に主張されるに及び、最も尖鋭な形をとつて現出した。アベラールは、彼等の下で、直接彼等の普遍論を學び、兩者に對する批判を通して、獨自の普遍論を樹立するに至る。

アベラールの普遍論は、彼の二つの『イサゴーゲ註釋』***のなかで展開されているが、彼はそこに於て、先ず當時の様々の普遍論――主としてギヨームの實在論とロスランの唯名論――を批判し、次に、自己の普遍論を開陳し、最後に、それによつてポルフィリウスの問題に一つの答を與えている。この論述形式は、彼の普遍論が以上のような狀況

の下で生れたことを示している。

全體として見るならば、アベラールの普遍論は、ロスランやギヨームの普遍論とは、廣さにおいても、深さにおいても、又、その整合性においても遙かに比較を絶し、諸問題の鋭い洞察と徹底的な究明、後のスコラに深甚な影響を與えた數々の優れた見解を備え、唯名論、實在論、概念論、更には又、アリストテレアニズムとプラトニズムの綜合の上に成立つ極めて獨自な體系を形成していると言えよう。

我々は以下、二つの『ポルフィリウス註釋』を中心に置き、第一に、アベラールのギヨーム及びロスランに對する批判を、次に、それから展開される彼の普遍論を記述し、最後に、その諸要素をポルフィリウス及びボエティウスに跡づけて考察することとしよう。

* "αὐτίκα περὶ τῶν γενῶν τε καὶ εἰδῶν τὸ μὲν εἴτε ὑφέστηκεν εἴτε καὶ ἐν μόναις ψιλαῖς ἐπινοίαις κεῖται εἴτε καὶ ὑφεστηκότα σώματα ἐστιν ἢ ἀσώματα καὶ πότερον χωριστὰ ἢ ἐν τοῖς αἰσθητοῖς καὶ περὶ ταῦτα ὑφεστῶτα, παραιτήσομαι λέγειν βαθυτάτης οὔσης τῆς τοιαύτης προτάσεως καὶ ἄλλης μείζονος δεομένης ἐξετάσεως"

(Porphyrii Isagoge et in Arist. Categorias Com., ed. Busse, p. 1)

** Abaelard, Epist. I. seu Historia Calamitatem, Cap. II, PL. 119 BC.

*** Beiträge, Band XXI, Bernard Geyer; Peter Abaelardus Philosophische Schriften, Logica, 'Ingredientibus' die Glossen zu Porphyrius; Logica 'Nostrorum petitioni sociorum' die Glossen zu Porhyrius. 何れもガイヤーによつて初めて刊行されたもので、Logica 'Ingredientibus' Logica 'Nostrorum petitioni sociorum' は、ガイヤーがそれぞれの冒頭の言葉からとつた名稱である。前者にはこの他に、die Glossen zu den Kategorien, die Glossen zu περὶ ἑρμηνείας, が含まれている。ここでは便宜上、前者を、第一のポリフィリウス註釋、後者を、第二のポルフィリウス註釋と呼ぶ。兩者の著作年代は、ガイヤーによれば、次の如くである。卽ち、第二のポルフィリウス註釋は、アベラールが既に神學の研究を始めた頃のもので、De Unitate et Trinitate Divina よりも後に、從つて一一二〇年後、Theologia christiana と前後して書かれた。これに對して、第一のポルフィリウス註釋は、ずつと初期のもので、兩者の間に、もう二つ別の註釋が書かれている。

(cf. Op. cit. Untersuchungen, s. s. 597–603)

ギョームの實在論に對する批判によつて、普遍は事物ではなく vox であることが結論され、ロスランの唯名論に對する批判から、普遍は單なる音聲ではなく、事物を表示する働を持つた言葉（vox significativa）であることが明らかにされる。彼の普遍論の根本命題はここに確立される。先ず、アベラールの理解するギョームの普遍論がいかなるものであるかを見、次に、それに對してアベラールがどのように批判するかを考察しよう。

一

アベラールの理解するギョームの普遍論がいかなるものであつたかは、アベラールが彼の一友人に對して、自己の身にふりかかつた樣々の不幸を物語る『第一書簡』のなかで示されている。彼は、ここで、ギョームと激しく論爭し、この上もない明白な論證によつて、ギョームが以前から抱いていた普遍論を打破り、それを變更することを餘儀なくせしめたと述べてから、「普遍の共通性に關するギョームの考は、本質的に同一の事物が、全體として同時に個々の個體に內在する、となすにあつた。卽ち、彼によれば、個々の個體の間に本質上の差異はなく、只、數多の附帶有による多樣さがあるのみである、というのである。今や彼は、その說を訂正して、本質的に同一の事物ではなく、無差別的に同じ事物を語るようになつた*」と書きしるしている。卽ち、アベラールによれば、ギョームは、個々の個體に全體として同時に內在する、本質的に同一の事物が普遍であると主張していたが、アベラールの攻擊にあつて、無差別說をとるに至つたのである。

* "Erat autem in ea sententia de communitate universalium, ut eamdem essentialiter rem totam simul singulis suis inesse astrueret individuis ; quorum quidem nulla esset in essentia diversitas, sed sola multitudine accidentium varietas. Sic autem istam suam correxit sententiam ut deinceps rem eamdem non essentialiter, sed indifferenter diceret." (Epist. I, seu historia calamitatum, Cap. II, PL. 119 AB)

ここで、ギヨームの從來からの說として語られている普遍論は、第一の『ポルフィリウス註釋』では、大要、次の如くに述べられている。卽ち、或る人々は、事物が普遍であると考えた。彼等は、形相（forma）によつて相互に異る樣々の事物のうちに、本質的に同一の實體（substantia）があるとし、この實體は、それ自體においては一であるが、個々のものに固有な樣々の形相によつて多樣であると主張する。そして、かかる實體が普遍であると言う。人間を例にとつて言えば、數的に異る個々の人間のうちに、同一の人間の實體があり、それがこの附帶有（accidens）によつてソクラテスになり、かの附帶有によつてプラトーとなるとする。そして、かかる人間の實體が人間という普遍であると考える。* それ故、彼等によれば、普遍とは、樣々の形相をあてがわれることによつて、時に人間の像となり、時に牛の顏となるが、それ自體においては同一の本質を維持する蠟の如きものである。**

* "Quidam enim ita rem universalem accipiunt, ut in rebus diversis ab invicem per formas eandem essentialiter substantiam collocent, quae singularium, in quibus est, materialis sit essentia et in se ipsa una, tantum per formas inferiorum sit diversa.....Verbi gratia in singulis hominibus numero differentibus eadem est hominis substantia, quae hic Plato per haec accidentia fit, ibi Socrates per illa." (Logica 'Ingredientibus', Glossen zu Porphy. p. 10)

** "Veluti si ex hac cera modo statuam hominis, modo bovis faciam diversas eidem penitus essentiae manenti formas aptando" (Ibid.)

この、ギヨームの舊說に對して、アベラールは次のように批判する。普遍とは、アリストテレスの定義によれば、「本性的に多くのものに述語づけられ得るもの（ὁ ἐπὶ πλείονων πέφυκε κατηγορεῖσθαι, quod de pluribus natum est aptum praedicari）」である。* これを「多くのもののうちに同時にあるもの」とも言うことができよう。「多くのものに述語づけられる」「多くのもののうちに同時にある」の意味を、更に嚴密に規定して言えば、ボエティウスが主張する如く、その諸部分が樣々のものに適合するということで、樣々のものに述語づけられるものではなく、全體として、同時に個々のものに內在するもの、と言わなければならぬ。** ところで、ギヨームは、事物が、卽ち、數的に一なる個體

的實體がこのようなものである、多くのものに同時に全體として內在し、それらに本性的に述語づけられる、と主張する。そこから、次のように多くの不合理なことが結果する。

第一に、もしそうであるとすると、かくかくの形相を受けているこの事物は、それとは異つた形相を受けているかの事物でなければならぬ。例えば、理性的動物は、非理性的動物でなければならぬ。すると、同一の事物（動物という實體）のうちに、同時に、反對のものが存續することになる。*** 更に、この說によれば、全ての事物の本質（essentia）は十の最高の類、卽ち、十の範疇につきることとなろう。けだし、個々の範疇（praedicamentum）には、只一つの本質しかなく、それは、旣に言われた如く、それに附帶している樣々の形相によつて多樣化しているに過ぎない。それ故、全ての實體が本質的には全く同一である如く、全ての量（quantitas）、全ての質（qualitas）は本質的に全く同一である。そうすると、ソクラテスとプラトーの間には、何の相違もない。けだし、ソクラテスとプラトーは、それぞれに固有な樣々の形相を有するが、それらは何れも十の範疇のどれかに屬する。ところが、同じ範疇に屬するものは全て本質的に同一である。ソクラテスの質はプラトーの質であり、ソクラテスの量はプラトーの量である。ソクラテスとプラトーのうちにある他のいかなるものについても同樣である。從つて、ソクラテスとプラトーを相違せしめるようなものは何もない、兩者は全く同一である。****

事物或は個體的實體が多くのもののうちに同時に內在し、それらに本性的に述語づけられるというギヨームの普遍論から、このように多くの不合理なことが結果する。それ故、事物は、多くのものに同時に內在し、それらに本性的に述語づけられ得ない、從つて、普遍ではない。

要するに、アベラールは、アリストテレスが『命題論』のなかで述べている普遍の定義を全ての普遍論の共通的地盤として根底に置き、ギヨームの普遍論を、アリストテレスの定義に適合しないと非難して、排斥するのである。

* "Aristoteles, De Interpretatione, Cap. 7, 17 a 39–40; Boethius, in libr. Arist. Peri Herm., ed. C. Meiser. t. 2, p. 135.

** "Quod si per partes de diversis praedicari concedatur, in eo scilicet quod singulae eius partes sibi ipsis aptentur, nihil ad communitatem universalis, quod totum in singulis teste Boethio esse debet atque in hoc ab illo communi dividitur quod per partes commune est." (Op. cit., p. 14)

*** "Si enim idem essentialiter, licet diversis formis occupatum, consistat in singulis, oportet hanc quae his formis affecta est, illam esse quae illis occupata, ut animal formatum rationalitate esse animal formatum irrationalitate et ita animal rationale esse animal irrationale et sic in eodem contraria simul consistere," (Op. cit. p. 11)

**** "Praeterea secundum positionem praemissae sententiae decem tantum omnium rerum sunt essentiae, decem scilicet generalissima, quia in singulis praedicamentis una tantum essentia reperitur, quae per formas tantum inferiorum, ut dictum est, diversificatur ac sine eis nullam haberet varietatem. Sicut ergo omnes substantiae idem sunt penitus, sic omnes qualitates et quantitates etc. Cum igitur Socrates et Plato res singulorum praedicamentorum in se habeant, ipsae vero penitus eaedem sint, omnes formae unius sunt alterius, quae nec in se diversa sunt in essentia, sicut nec substantiae quibus adhaerent, ut qualitas unius et qualitas alterius, cum utraque sit qualitas." (Op. cit. p. 12)

それでは、ギヨームが、アベラールのかかる攻撃にあつて新たに作り上げた新説、即ち、無差別説とは、いかなるものであるか。第一の『ポルフィリウス註釋』は、他の人々の考として、これを、次のように紹介している。

即ち、他の人々は、個々の事物は、單に形相によつて相違するのではなく、それぞれの本質において個々別々である、だがこのようにして相互に區別されている個々のものは、無差別的に(indifferenter)同じものである、と言い、そこから、個別が同時に普遍であると主張した。個々のものが無差別的に同じものであるというのは、それ自體においては全く他と區別された個々のものが、何らかの點で一致している、即ち、或る點では差別がない、ということである。例えば、ソクラテスとプラトーは、人間において同じである、即ち、人間性において相違しない、ということである。*このことによつて、ソクラテスやプラトーの如き個別が同時に普遍であると主張するのは、「述語づけられる」を「一致する」という意味に解してである。彼等は、ソクラテスが多くの人間について述語づけられるということは、多くの人間がソクラテスと、或は、ソクラテスが多くの人間と同じである、即ち、一致するということである

と主張する。**「述語づけられる」がこのような意味であるとすると、ソクラテスは人間性において多くの人間と一致するから、人間である限りにおいて、多くの人間に述語づけられる。

* "idem non essentialiter quidem, sed indifferenter ea quae discreta sunt, appellant, veluti singulos homines in se ipsis discretos idem esse in homine dicunt, id est non differre in natura humanitatis," (Op. cit. p. 14)

** "cum dicunt rem illam quae Socrates est, praedicare de pluribus, figurative accipiunt, ac si dicerent: plura cum eo idem esse, id est convenire, vel ipsum cum pluribus." (Ibid.)

この無差別説に對しても、アベラールは、そこから生じる矛盾をつくという仕方で、種々批判を加えているが、彼がこの説に對してとる態度を最も明らかに示しているのは次の如きものであろう。

即ち、「彼等は、ソクラテスとプラトーは人間という事物において一致すると主張するのであるが、人間という事物は、ソクラテスであるか、或は、その他のものである。從つて、ソクラテスは、自己自身においてプラトーと一致するか、或は、他のものにおいて一致するかである。しかるに、ソクラテスは、自己自身においては、プラトーと一致するよりは相違する。又、他のものにおいて、プラトーと一致する筈はない。ソクラテス自身、ソクラテスとは別のものではないから。*」

要するに、アベラールは、ギヨームの新説と舊説との間に根本的な相違を認めないのである。彼は、ギヨームが、個々の人間が人間、或は、人間性において一致するというのを、個々の人間が人間、或は、人間性という事物において一致するという意味に解し、事物といわれるものは、ソクラテスとかプラトーの如き個體であつて、それ以外に事物はない、それ故、個々のものがそれにおいて一致するような事物はない、從つて、個々の人間が、人間、或は、人間性において一致するということはできない、と主張するのである。

* "Si enim Socrates in re quae homo est cum Platone conveniat, nulla autem res homo sit nisi ipsae Socrates vel alius, oportet ipsum cum Platone vel in se ipso convenire vel in alio. In se autem potius diversus est ab eo; de alio quoque

constat, quia nec ipse est alius." (Op. cit. p. 16)

** アベラールは、尚この他に、omnes homines simul collecti が homo という species であるとする集合説を紹介し、これに對して批判している (Op. cit. pp. 14-15)。この説を主張するのは、ソールズベリのジョンによれば、ソワソンのゴスレヌス (Gauslenus, Goscelin of Soisson) であつた。(Cf. John of Solisbury, metalog. L. II. C. 17. PL. 199, 876 A)

さて、以上の如きギヨーム批判によつて得られた結果は、普遍は事物ではあり得ないということ、個々のものがそれにおいて一致するような事物はどこにもないということ、この二つである。アベラールは、そこから、普遍は vox であるとする以外に道はない、vox にのみ普遍性があり得る (restat ut huiusmodi universalitatem solis vocibus adscribamus) と斷言する。

次に、我々は、ロスランの普遍論に對するアベラールの批判を吟味しよう。ロスラン批判を通して、普遍は、單なる物理的な音聲の意味での vox ではなく、諸事物を表示する vox、卽ち、vox significativa であることが明らかにされる。

先ず、アベラールの理解するロスランの普遍論がいかなるものであるかは、アベラールが『辯證法 (Dialectica)』のなかで、ロスランは、諸部分から成立つているような事物はなく、事物を成立たせている部分というのは、丁度、種が單なる vox に過ぎない如くに、單なる vox に過ぎないという不合理な見解を抱いた、と述べているところから明らかである。* ここの「種が單なる vox に過ぎない如く」というところをとれば、ロスランが、種とか類の如き普遍は單なる vox に過ぎない、と考えていたことが知られる。アンセルムスも、又、『三位一體の信仰』のなかで、普遍的な實體は音聲の流に過ぎないと考えるような我々の時代の辯證論者達は、靈的な問題を論じる資格がない、ということを言つているが、** これは、このようなロスランの普遍論に對して言われていることであろう。

* "Fuit autem, memini, magistri nostri Roscellini tam insana sententia ut nullam rem partibus constare vellet, sed

sicut solis vocibus species, ita et partes adscribebat. (Dialectica, Cap. 5, Liber divi. et def., Ouvrages inédits d'Abelard ed. Cousin, p. 471)

** "Illi utique nostri temporis dialectici (immo dialectice haeretici, qui non nisi flatum vocis putant esse universales substantias……) prorsus a spiritualium quaestionum disputatione sunt exsufflandi." (Anselmus, De Fide Trinitatis, Cap. II. P L, 158, 265 AB.)

第二の『ポルフィリウス註釋』は、かかるロスランの見解に反對し、普遍は單なる音聲の流ではあり得ないということを、先ず、voxとsermoの相違を示し、次に、普遍はvoxではなく、sermoであると主張して、明らかにする。先ず、voxとsermoは次のように相違する。卽ち、sermo或はnomenとは、人々の慣習(institutio)から生じたものであるに對し、vox或はresは自然の所産である。從つて、兩者は、本質においては全く同一であるとしても、nativitasで相違する。* 兩者の關係は、この石とこの石像の關係である。この石(hic lapis)とこの石像(haec imago)は、本質においては全く同一であるが、前者が自然の所産であるに對し、後者は人間の手によつて始めて作られる。

さて、このようにvoxとsermoは相違するが、普遍的であるのはsermoであつて、voxではない。けだし自然の所産たるvoxは或る事物であるが、事物が多くのものに述語づけられるとすると、同じ事物が多くのもののうちに同時に見出されることになろうから。** このことが不可能なることは、先のギヨーム批判において、明らかにされている。

* "Quid enim aliud est nativitas sermonum sive nominum, quam hominum instituio? Hoc enim quod est nomen sive sermo, ex hominum institutione contrahit. Vocis vero sive rei nativitas quid aliud est, quam naturae creatio, cum proprium esse rei sive vocis sola operatione naturae consistat? Itaque nativitas vocis et sermonis diversitas, etsi penitus in essentia identitas." (Logica 'Nostrorum petitioni sociorum,' p. 522)

** "voces vero sive res nullatenus universales esse, etsi omnes sermones voces esse constat. Si enim aliqua res de pluribus praedecaretur, utique eadem in pluribus reperiretur." (Ibid.)

以上のことを、アベラールは、多くの異論をあげ、それに答えながら、より明らかにしていく。異論を一つにまとめて述べると次のようになる。どうして vox（音聲）ではなく、sermo（言葉）が普遍であるというのか。けだし、類とは、種的に相違した多くのものに述語づけられるところのもの（id quod praedicatur de pluribus differentibus specie）である。ところが、言葉も音聲も、同様に、「多くのものに述語づけられるところのもの」である。それ故、音聲も類である。

これに對して、アベラールは次のように答える。即ち、音聲は多くのものに述語づけられるところのものであることは容認できる。しかし、この「多くのものに述語づけられるところのもの」は、決して、類の完全な定義ではない。完全な定義は、定義されるものと全く同一でなければならぬ。そのような類の完全な定義は「種的に相違した多くのものについて述語づけられ得るもの（praedicabile de pluribus differentibus specie）」である。即ち、類には praedicabilitas というものがなければならぬ。それ故、「類は音聲である」「種は音聲である」は正しい。しかし、その逆「音聲は類である」「音聲は種である」は容認さるべきでない。*

要するに、アバラールは、單なる音聲ではなく、人間の手によつて、praedicabilitas という形相が附加された vox 即ち、sermo が普遍であると主張するのである。

この事は、第一の『ポルフィリウス註釋』においても、次のようにして言われている。

即ち、「普遍的な、共通的な vox は、多くのものを名指すことによつて共通的である。その本質においてではなく、この名指す働において、多くのものに述語づけられる。**」それ故、第一の『ポルフィリウス』註釋において用いられている vox も、自然の音聲の意味での vox ではない。從つて、アベラールが、第一の『ポルフィリウス註釋』で、普遍は vox であると言つたのを、第二の『ポルフィリウス註釋』で、sermo であると言い換えているのは、自己の立場とロスランの立場の相違を明らかにせんとした爲であると考えられる。アベラールがそのようにせざるを得なかつ

たのは、普遍は音聲の流に過ぎないというロスランの普遍論が、當時既に、異端の嫌疑を受けていたからであろう。***

* "Vox vero illud non habet, in quo terminatur descriptio et quod per diffinitionem copulatur, scilicet praedicabilitatem de pluribus, sed est illud quod praedicatur, quia est sermo praedicabilis.....haec propositio vera est: genus est vox et species est vox.....Conversae harum, scilicet: vox est genus vel vox est species, non sunt concedendae, cum per illas communitas essentiae ostendatur, quae similiter in omnibus reperitur." (Op. cit. pp. 523-524)

** "Vox communis.....communis est per nominationem in appelatione multorum, secundum quam scilicet appellationem, non secundum essentiam suam de pluribus est praedicabilis" (Logica 'Ingredientibus' Glossen zu Porphyrius, p. 32)

*** Cf. John of Solisbury, Policrat., L. VII. C. 12, PL 199, 165 A "Sunt tamen adhuc qui deprehenduntur in vestigiis eorum (i. e. sectatorum Roscelini), licet erubescant auctorem vel sententiam profiteri, solis nominibus inhaerentes, quod rebus et intellectibus subtrahunt, sermonibus ascribunt."

以上、ギヨーム、及び、ロスランに對する批判を通して、普遍は事物ではなく、vox であること、この vox は、自然の音聲ではなく、vox significativa 或は、sermo（言葉）であること、が明らかにされた。これが、アベラールの普遍論の出發點である。

ところが、ここから、そうすると普遍は一體何を、どのようにして表示するのか、という疑問が生じる。けだし、普遍は、言葉或は名稱であるといつても、ソクラテスやプラトーの如き個別的な名稱ではなく、動物、人間の如き普遍的な名稱である。しかるに、先の實在論批判において、普遍的な事物というものはなく、實在する事物は、全て、個々別々に存在すること、及び、かかる諸事物がそれにおいて一致しているような事物は、どこにも見出されないということ、が明らかにされている。從つて、普遍的な言葉或は名稱は、普遍的な事物を表示し、それに賦與されるということはできない。普遍的な事物というものは存在しないから。又、個體的な差異を含めた、ソクラテスの全體を表示するのでもない。そのようなものを表示するのは、ソクラテスという個別的な言葉であるから。更に、ソクラテスとプラトーが、それにおいて一致している事物を表示するということもできない。そのような事物はどこにも存し

ないから。それ故、普遍的な言葉或は名稱は、何らかの事物についての概念を我々の心のうちに構成するようなものではない。表示には全く無縁なものであると思われる。*

普遍は表示する言葉であるとすると、直ちに、このような問題が生じる。從つて、この問題が解決されなければ、普遍は言葉である、と主張することはできない。我々は次に、アベラールがこの問題をいかに解決するかを考察することにしよう。彼の普遍論の正否は、かかつて、この問題の解決のうちにある。

* "Rebus autem nullis videbantur imponi universalia nomina, cum scilicet omnes res discrete in se subsisterent nec in re aliqua, ut ostensum est, convenirent, secundum cuius rei convenientiam universalia nomina possint imponi.....Nullum itaque significare videtur vel homo vel aliud universale vocabulum, cum de nulla re constituat intellectum.....Quapropter universalia ex toto a significatione videntur aliena." (Logica 'Ingredientibus', Glossen zu Porphyrius, pp. 18-19)

II

彼の解決を豫め要約すれば、次の如くである。普遍的な言葉は、それにおいて個々の事物が一致している、「人間たること (esse hominem)」「動物たること (esse animal)」の如き事物の「狀態 (status)」の類似概念を我々の魂のうちに生み出す。從つて、普遍的な言葉は、直接的には、事物の「狀態」の類似概念及び事物の「狀態」を表示する。ところが、事物の「狀態」とは、それにおいて事物が一致しているところのもの、換言すれば、個々の事物が共有しているところのものであるから、事物の「狀態」を表示することは、同時に、個々の事物をも表示することである。それ故、普遍的な言葉は、事物の「狀態」の類似概念及び事物の「狀態」を表示することによつて、同時に、個個の事物をも表示する。

このことを明らかにする爲に、アベラールは、第一に、事物の「狀態」——それによつて普遍的な言葉が個々の事物に賦與されるので、共通的原因 (communis causa)とも呼ばれる——とは、いかなるものであるかを述べ、次に、

その類似概念――これをアベラールは共通的概念（communis conceptio）と呼ぶ――は、普遍的な言葉によつて我我の魂のうちに生み出される思惟、即ち、普遍的なものの思惟（intellectus universalium）の思惟對象であることを明らかにし、第三に、普遍的な言葉が共通的概念を表示することを、權威によつて確證し、最後に、普遍的な言葉によつて生み出される思惟、共通的概念を思惟する思惟は、抽象作用によつて生じる、抽象的思惟であることを主張し、抽象的思惟の性格を吟味することによつて、かかる思惟が空虛な思惟ではない所以を明らかにする。

以上を、アベラールの言葉をたどつて述べれば、次のようになる。彼は、先ず、この問題に對して、次のように述べる。「しかしながら、事態はそのようではない。けだし、普遍的な言葉は、多様な諸事物を名指すことによつて、或る仕方で、それらを表示するから。人間という普遍的な言葉は、共通的原因『人間たること』によつて、個々の人間を名指し、又、（我々の魂のうちに）或る共通的な概念を構成する。*」

* "Sed non est ita. Nam et res diversas per nominationem quodammodo significant,.....Ut haec vox 'homo' et singulos nominat ex communi causa, quod scilicet homines sunt, propter quam universale dicitur, et intellectum quendam constituit communem." (Op. cit. p. 19)

では、共通的原因とは何か。アベラールは、これを次のように述べる。共通的原因とは、それにおいて個々の事物が一致している、事物の「狀態（status）」である。人間を例にとつて言えば、相互に個々別々の人間は、それぞれに固有な本質において、又、形相において相違し、それらがそれにおいて一致しているような事物は見出されない。しかし、いかなるものにおいても全く一致しないというのではなく、個々の人間は、「人間たること（esse hominem）」で一致している。「人間たること」は「人間」の如き事物ではないが、それにおいて個々の人間が一致している。それは、「基體のうちにないこと」或は「反對性を受容れないこと」が事物ではないにも拘らず、それにおいて個々の實體が一致しているのと同様である。* このように言うと、個々の人間が、いかなるものでもない、無において一致す

ると言つているように思われるかもしれない。しかし、そうではない。「人間たること」は事物ではないが無ではなく、人間の「狀態」である。** もし、事物（res）という言葉を廣義に解するならば、かかる人間の「狀態」を、人間の本性のうちに定立されている事物と呼んでもよい。普遍的な言葉（人間）を個々の人間に賦與する人は、かかる、人間の本性のうちに定立されている事物（卽ち、人間の「狀態」）の類似を魂のうちに把持する。***

* "Singuli homines discerci ab invicem, cum in propriis differant tam essentiis quam formis, ut supra meminimus rei physicam inquirentes, in eo tamen conveniunt, quod homines sunt. Non dico in homine, cum res nulla sit homo nisi discreta, sed in esse hominem. Esse autem hominem non est homo nec res aliqua, si diligentius consideremus, sicut nec non esse in subiecto res est aliqua nec non suscipere contrarietatem vel non suscipere magis et minus, secundum quae tamen Aristoteles omnes substantias convenire dicit." (Op. cit. p. 19)

** "Abhorrendum autem videtur, quod convenientiam rerum secundum id accipiamus, quod non est res aliqua, tamquam in nihilo ea quae sunt, uniamus, cum scilicet hunc et illum in statu hominis, id est in eo quod sunt homines, convenire dicimus. Sed nihil aliud sentimus, nisi eos homines esse, et secundum hoc nullatenus differre, secundum hoc, inquam, quod homines sunt, licet ad nullam vocemus essentiam. Statum autem homines ipsum esse hominem, quod non est res, vocamus quod etiam diximus communem causam impositionis nominis ad singulos, secundum quod ipsi ad invicem conveniunt." (Op. cit. p. 20)

*** "Statum quoque hominis res ipsas in natura hominis statutas possumus appellare, quarum communem similitudinem ille concepit, qui vocabulum imposuit." (Ibid.)

それでは、共通的概念とはいかなるものであるか。それは、この、事物の「狀態」に對應する、事物の「狀態」の類似であるが、アベラールはこれを、我々の側から、卽ち、我々の思惟活動の方から明らかにしていく。我々の思惟活動の方から言えば、共通的概念とは、普遍的な言葉が我々の魂のうちに生み出す思惟の對象、卽ち、普遍的なものの思惟が思惟する形相である。このことを述べんが爲に、アベラールは、先ず、思惟一般の性格を感覺との對比において示し、次に、普遍的なものの思惟（intellectus universalium）と個別的なものの思惟（intellectus singularium）

の相違を明らかにする。

第一に、思惟の性格を一般的に述べれば、次の如くである。即ち、感覺は、身體的器官を媒介にして行なわれるから、魂が感覺する時には、感覺される物體が現存していなければならぬ。これに對して、魂が思惟する時には、魂は、自らのうちに思惟される事物の類似を形成し、これに思惟活動を向ける。從つて、思惟は、思惟される事物が消滅しても、その類似が魂のうちに保持されている限り存續する。* アベラールは、魂が思惟する時自らのうちに形成するこの事物の類似を、思惟が把持する事物の形相 (forma rei quam intellectus concipit)、或は、思惟がそれに向けられるところの形相 (forma in quam intellectus dirigitur) とも呼ぶ。思惟とは、かかる、事物の形相に向けられる活動である。

ところで、思惟には、普遍的なものの思惟と個別的なものの思惟がある。前者には「人間」の如き普遍的な言葉が我々の魂のうちに産出する思惟であり、後者は「ソクラテス」の如き個別的な言葉が我々の魂のうちに生み出す思惟である。兩者は次の點で、即ち、前者が多くの事物に共通的な混然たる形像を把持するに對し、後者は、一つのものに固有な個別的形相を把持するという點で、相違する。例えば、我々が、「人間」という言葉を聞く時、全ての人間に共通的であつて、そのうちのどれにも固有でない或る形像が魂のうちに生じるが、「ソクラテス」という言葉を聞く時は、特定の人物の類似を表明している個別的な形相が魂のうちに生じる。** それ故、一人の人間に固有な形相を魂のうちに生み出す「ソクラテス」という言葉によつては、或る特定の事物が規定されるが、「人間」という言葉によつては、人間のなかの或る一人が特に思惟されるようなことはない。要するに、普遍的な言葉が惹起する思惟と個別的な言葉が惹起する思惟の相違は、それらが把持する形相の相違に歸着する。前者、即ち、普遍的なものの思惟が把持する形相は、言つてみれば、全ての獅子の本性を示す爲に畫かれた、個々の獅子のどれにも固有でない一枚の繪である。(これに對して、後者、即ち、個別的なものの思惟が把持する形相は、あらゆる獅子のなかから、特に一匹を

區別せんが爲に、ヘラクレスの槍によつて傷つけられたようにして畫かれた繪であろう。）共通的概念とは、かかる、普遍的な思惟が思惟する形相、例えば、全ての獅子に共通で、そのうちのどれにも固有でない形相である。

* "Intellectus autem sicut nec corporeo indigens instrumento est, ita nec necesse est eum subiectum corpus habere in quod mittatur, sed rei similitudine contentus est, quam sibi ipse animus conficit, in quam suae intelligentiae actionem dirigit. Unde turre destructa vel remota sensus qui in eum agebat, perit, intellectus autem permanet rei similitudine animo retenta." (Op. cit. p. 20)

** "Ille qui universalis nominis est, communem et confusam imaginem multorum concipit, ille vero quem vox singularis generat, propriam unius et quasi singularem formam tenet, hoc est ad unam tantum personam se habentem. Unde cum audio 'homo', quoddam instar in animo surgit, quod ad singulos homines sic se habet, ut omnium sit commune et nullius proprium. Cum autem audio 'Socrates', forma quaedam in animo surgit, quae certae personae similitudinem exprimit." (Op. cit. p. 21)

次に、普遍的な言葉を聞くと、我々の魂のうちに共通的概念が生じる、と先に言われたが、果して、普遍的な言葉は、我々の魂のうちに、共通的概念を生み出すであろうか。換言すれば、共通的概念を表示するであろうか。これに對して、アベラールは、このことは多くの權威によつて保證されていると主張する。

例えば、プリシアヌスは、現實化されて物體となる以前に、神の精神のうちに可知的に構成される諸事物の共通的な形相（formae quae in mente divina intelligibiliter constituuntur）、卽ち、神がそれを原型として被造物を作り出していくところの、神の精神のうちに把持された諸概念（conceptiones）に言及し、類的或は種的名稱が、我々に、これらの形相或は概念を指示するという理由で、これらの概念或は、形相を、類的或は種的概念と呼んでいる。又、彼は、普遍的な名稱は、これら共通的概念の、謂わば、固有な名稱である、一つのものに固有な名稱が、それを表示する一つの事物に、それを聞くものの魂を向ける如くに、普遍的な名稱は、それを聞くものの魂を、直ちに、これらの共通的概念に向ける、とも言う。* 創造の原型となるような神の精神のうちにある形相或は概念は、我々人間のあず

かり得ないものであつて、只、神の精神のうちにのみ存する。しかし、ともかく、彼はここにおいて、明らかに、言葉は精神のうちにある概念或は形相を表示すると主張している。

更に、ボエティウスも、多くのものの類似から收集された思考が類や種である、と言う時、この同じ（即ち、類的或は種的名稱によつて表示される）共通的概念を考えていたように思われる。**

アベラールは、尙、これに、プラトーの權威を、次のように附加えている。即ち、「更に又、或る人々は、プラトーが、ヌースのうちに措定する共通的なイデアを、類とか種と呼んでいるところから、プラトーも同じ考を持つている、と主張する」

ところで、アベラールは、これに對しては、「ボエティウスが、プラトーとアリストテレスの意見が分れたと記載しているが、それは、恐らく、この點においてであろう」と述べ、ボエティウスが言うところによると、プラトーは、類や種の如きものは、普遍的なものと思惟されるだけではなく、物體を離れても存在し、自存するとなした、これは、物體から分離したものとしてヌースのうちに置く、かの共通的概念が普遍である、ということであろう、と書きしるしている。そして、ボエティウスに從つて、プラトーは、恐らく、アリストテレスのように、普遍を、共通的な述語づけという觀點からではなく、多くのものの共通的類似という點で把握したのであろう、と附記している。***

しかしながら、これだけではなく、尙、これに續いて、アベラールは、ボエティウスが、プラトーは普遍が可感的なものを離れて自存すると考えた、と述べているのを、アリストテレスとプラトーの見解が、このように、相對立しないように解することもできるとして、次のような自己の解釋を提出している。即ち、「アリストテレスが、普遍は常に可感的なもののうちに存在する、と述べるのは、その現實に關してである。何となれば、動物という本性（natura）、――それは、普遍的な名稱によつて指示される、從つて、一種の轉用によつて、普遍と言われる――は、現實的には（actualiter）、可感的なもののうちにしか見出されないから。これに對して、プラトーは、かかる本性は、感覺の下

に入り来らずに自らの存在を維持するようにして、それ自體、本性的に自存する、そして、この本性的な存在に則して、普遍的な名稱で呼ばれる、と考える。從つて、アリストテレスが、その現實に關して否定したというのものを、プラトーは、その本性的な適應性 (aptitudo) という見地から、認めるのである。それ故、兩者の見解に、何ら相對立したというのはない。****」

我々は、このアベラールのプラトン解釋のうちに、アベラールの質在論、或はプラトニズムを明らかに看取することができるが、この點は後に述べることとして、ここでは、只、このすぐ後に、共通的原因、卽ち、事物の「狀態」は、事物の本性 (natura) に則して取得される (communis causa quae secundum rerum accipitur natura) と述べられていることを附加えておこう。

* "Communes autem has conceptiones inde generales vel speciales Priscianus vocat, quod eas nobis generalia vel specialia nomina utcumque insinuant. Ad quas quidem conceptiones quasi propria nomina esse dicit ipsa universalia, quae licet confusae significationis sint, quantum ad nominatas esenstias, ad communem illam conceptionem statim dirigunt animum auditoris sicut propria nomina ad rem unam quam significant." (Op. cit. p. 23)

** "Boethius quoque cum ait cogitationem collectam ex similitudine multorum genus esse vel speciem, eandem communem conceptionem intellexisse videtur." (Op. cit. pp. 23–24)

*** "In qua etiam sententia Platonem fuisse quidam autumant, ut videlicet illas ideas communes, quas in noy ponit, genera vel species appellaret. In quo fortasse Boethius eum ab Aristotele dissensisse commemorat, ubi is ait eum voluisse genera et species ceteraque non solum intelligi universalia, verum etiam esse ac praeter corpora subsistere, ac si diceret illas communes conceptiones, quas separatas a corporibus in noy constituit, eum intellexisse universalia, non fortasse accipientem universale secundum communem praedicationem, sicut facit Aristoteles, sed magis secundum communem multorum similitudinem." (Ibid.)

**** "Potest et aliter solvi quod ait Platonem putare universalia extra sensibilia subsistere, ut nulla philosophorum sit sententiae controversia. Quod enim ait Aristoteles universalia in sensibilibus semper subsistere, quantum ad actum

dixit, quia scilicet natura illa quae animal est, quae universali nomine designatur ac secundum hoc per translationem quandam universalis dicitur, nusquam nisi in sensibili re actualiter reperitur, quam tamen Plato naturaliter subsistere in se sic putat, ut esse suum retineret non subiecta sensui, secundum quod esse naturale universali nomine appellatur. Quod itaque Aristoteles quantum ad actum denegat, Plato, physicae inquisitor, in naturali aptitudine assignat, atque ita nulla est eorum controversia. (Ibid.)

さて、アベラールは、以上のように、普遍的な名稱によつて、精神のうちに把持される共通的形相、或は、概念が指示されることを保證すると思われる諸々の權威を援用した後、このことは、單に諸權威の言葉に一致するのみならず、合理的でもある、と主張する。そして、尙、次のようなことを、權威が保證することではないが、不合理ではないとして、附加えている。それは名稱の表示（nominum significatio）は、事物及び思惟と並んで、それらと同等に實在的な或るものであるということである。* アベラールは、只、これだけのことを述べているのであるが、我々はこれを次のように解しておこう。我々が普遍的な言葉を聞くと、それによつて共通的概念を把持すると言われた場合、それは、或る普遍的な言葉によつて、我々のうちの或る一人が、或る共通的概念を把持するということではなく、全ての人が同じ仕方で、同じ共通的概念を把持するということである。そこで、このことを、普遍的な名稱は、かかる共通的概念を表示する（significare）と言い換えることができる。名稱は、名稱であるかぎりにおいて、全て、このような表示の働を有する。全ての名稱にかかる表示の働が備わつており、この働は、その名稱を理解する全ての人の下において、同じ仕方で働く。そこで、この名稱の表示が、事物及び思惟と同等の實在性を有する或る事象であると言われるのである。

* "Sed profecto cum eas ab intellectibus diversas facimus, iam praeter rem et intellectum tertia exiit nominum significatio. Quod etsi auctoritas non habet, rationi tamen non est adversum." (Ibid.)

最後に、共通的概念を思惟する普遍的なものの思惟を更に吟味すると、それが抽象作用によつて生じる抽象的思惟

(intellectus per abstractionem) であることが知られ、そこから、共通的概念を思惟する思惟が、空虛な思惟ではないことが確認できる。先ず、抽象的思惟とは、どのような思惟であるか。

具體的な例を用いて示せば、常に結合して存在する形相と質料のうち、一方を他方のものから切離して獨立に考察するのが抽象的思惟である。或は、この人間の實體は、物體であり、動物であり、人間である。又、その他の數限りない形相を伴つている。かかる人間の實體を、全ての他の形相を取り去り、實體の本質においてしか見ないのが抽象的思惟である。*

* "Verbi gratia huius hominis substantia et corpus est et animal et homo et infinitis vestita formis, quam dum in materiali essentia substantiae attendo formis omnibus circumscriptis, per abstractionem intellectum habeo." (Op. cit. p. 25)

ところで、抽象的思惟は、これらの例において明らかな如く、事物をそれ自體のあり方とは別のあり方において考察する。質料と形相は、決して分離して存在していないのに、形相だけを、或は、質料だけを別にとり出して考察する。そこで、抽象的思惟は全く空虛な思惟ではないかという疑問が生じる。* これに對して、アベラールは、次のように主張して、それが空虛ではない所以を明らかにする。

成程、もし事物を、その事物にはない何らかの本性、或は、固有性で考察するという仕方で、その事物のあり方とは別様に思惟するというのであれば、かかる思惟は全く空虛である。** ところが、抽象的思惟はこのような思惟ではない。けだし、それは、この人間を、動物、人間、教養あるもの等の本性においても見るのではなく、實體或は物體(corpus) の本性においてしか見ないのであるが、實體或は物體の本性は、この人間の本性であるが故に、只この人間の有する全てのものを思惟するのではないだけで、この人間のうちにないような本性を思惟するのではないから。*** 從つて、他の諸々の本性の中で只この本性だけを見るという場合に、この只は、見方に歸すべきで、事物の存在樣態に歸すべきではない。何となれば、只、この本性だけが獨立的に存在しているというのではなく、只この本性だけが

見られるのであるから。**** 我々は、或るものが思惟される仕方は、そのものの存在樣態と異る (alius modus est intelligendi quam subsistendi) ということを知らなければならぬ。抽象的思惟においては、このものが他のものから切離されて、獨立に思惟されるのであるが、その時、このものが他のものから切離されていると思惟されるのではない (separatim namque haec res ab alia, non separata intelligitur)。

* "Cum enim materiam per se vel formam separatim (huiusmodi intellectus per abstractionem) attendant, nulla tamen earum separatim subsistat, profecto rem aliter quam sit, videntur concipere atque ideo cassi esse." (Ibid.)

** "Si quis enim hoc modo aliter quam se habeat res, intelligat, ut videlicet ipsam attendat in ea natura vel proprietate quam ipsa non habeat, iste profecto cassus est intellectus." (Ibid.)

*** "Sed hoc quidem non fit in abstractione. Cum enim hunc hominem tantum attendo in natura substantiae vel corporis, non etiam animalis vel hominis vel grammatici, profecto nihil nisi quod in ea est, intelligo, sed non omnia quae habet, attendo." (Ibid.)

**** "Et cum dico me attendere tantum eam (naturam substantiae vel corporis) in eo quod hoc habet, illud 'tantum' ad attentionem refertur, non ad modum subsistendi, alioquin cassus esset intellectus. Non enim res hoc tantum habet, sed tantum attenditur ut hoc habens." (Ibid.)

以上で、抽象作用によつて生じる抽象的思惟が、空虛な思惟ではないことが明らかであるが、これから、先の普遍的な言葉によつて生み出される思惟、普遍的なものの思惟をふりかえつて見ると、それが、抽象作用によつて生じる抽象的思惟であることが知られる。けだし、「人間」とか「白さ」とか「白」という言葉を聞くと、我々は、それらによつて、事物のうちにある全ての本性、全ての固有性を心に思い浮べるのではなく、只「理性的な死すべき動物」を思い浮べるだけであるから。*

* "Nunc autem multis de natura abstractionis ostensis ad intellectus universalium redeamus, quos semper per abstractionem fiere necesse est. Nam cum audio 'homo' vel 'albedo' vel 'album', non omnium naturarum vel proprietatum, quae in rebus subiectis sunt, ex vi nominis recordor, sed tantum per 'homo' animalis et rationalis mortalis,"....(Op. cit. p. 27)

以上二つのことから、卽ち、普遍的な言葉によつて生み出される思惟、普遍的なものの思惟は、抽象的思惟であること、抽象的思惟は空虛な思惟ではないということ、この二つのことから、普遍的なものの思惟が、空虛な思惟ではないことは、明らかである。又、このことによつて、かかる思惟が思惟する共通的概念、及び、かかる思惟を生み出す普遍的な言葉は、空虛ではなく、諸事物の狀態に對應し、諸事物を正しく表示していることが確證される。

以上で、普遍的な言葉がいかにして個々の諸事物を表示するかが、明らかにされた。普遍的な言葉を聞くと、我々は、直ちに、抽象的思惟によつて、共通的概念を思惟するが、共通的概念には、個々の事物が、それにおいて一致しているところの事物の「狀態」が對應している。このことは、共通的概念を思惟する抽象的思惟が、事物の狀態にそぐわない空虛な思惟ではないことによつて確認できよう。それ故、普遍的な言葉は、共通的概念、及び、事物の「狀態」を通して、個々の事物を表示する。

さて、アベラールは、『イサゴーゲ註釋』において、『イサゴーゲ』が提出する三つの問題を解決するための前提として、自己の普遍論を大要、以上の如くに記述する、我々は、次に、この普遍論のうちに含まれている諸要素を、ポルフィリウス、及び、ボエティウスに跡づけて考察し、アベラールが、そのそれぞれを、いかに自己の普遍論のうちに取入れているかを究明することとしよう。

三

第一に、アベラールの唯名論を、ボエティウスの『アリストテレス範疇論註釋』に跡づけ、次に、彼の狀態說の淵源を、同じボエティウスの『イサゴーゲ註釋』に求め、最後に、彼のプラトニズムを、ポルフィリウスの『イサゴーゲ』から、考察することにしよう。

第一の點に關しては、先ず、ボエティウスの『範疇論註釋』第一卷序說を見て、ここにアベラールの唯名論の典據があることを示し、次に、アベラールが、これを彼自身の『イサゴーゲ註釋』『命題論註釋』に、いかに取入れているかを考察しよう。

さて、ボエティウスの『範疇論註釋』第一卷序說を見ると、ボエティウスは、ここで、『範疇論』が取扱つているのは事物ではなく、言葉（vox 或は sermo）であることを、次のようにして、主張している。

或る人々は、『範疇論』に、『諸事物について』という標題を附し、他の人々は『諸事物の類について』という標題を與えたが、どちらも同樣の誤を犯している。けだし、この書で取扱われているのは、諸事物の類でも、又、諸事物でもなく、諸事物の類を表示する言葉であるから。このことを、アリストテレス自身が、「結合によらずして單獨に語られるところの諸々のもののうち、或るものは實體を表示し、或るものは量を表示する」という言葉で明言している。もし、アリストテレスが、この書のなかで、諸事物の區分をなしているのであるならば、表示するとは言わなかつたであろう。何となれば、事物は、表示されるのであり、決して表示するようなことはないから。*

更に又、「上述のものはいずれも、それ自體肯定において語られることはないが、これらの相互の結合によつて肯定が生じる」によつても、アリストテレスが、ここで、事物ではなく、事物を表示している言葉を考察していることが知られる。けだし、陳述（oratio）に肯定があるのであるから、諸事物が結合されても肯定が生じるようなことはない。そこで、諸々の範疇が結合されると肯定が生じ、肯定は陳述のうちにしかない、しかして、肯定が生じるように結合されるのは、諸事物を表示する言葉である、とすれば、『範疇論』が取扱つているのは、諸事物ではなく、諸事物を表示する言葉である。從つて、『諸事物について』或は『諸事物の類について』という標題は正しくない。**

さて、以上のようにしてボエティウスは、『範疇論』第四章の "εἰ δὲ κατὰ μηδενὸς συμπλοκὴν λεγομένων ἕκαστον ἤτοι οὐσίαν σημαίνει ἢ ποσὸν..... ἕκαστον δὲ τῶν εἰρημένων αὐτὸ μὲν καθ'αὑτὸ ἐν οὐδεμιᾷ κατηγορίᾳ λεγομένων ἕκαστον ἤτοι τῇ πρὸς ἄλληλα τούτων

συμπλοκῇ κατάφασις γίγνεται" を典據とし、範疇のそれぞれは、事物ではなく言葉であると主張している。ところで、範疇は、ポルフィリウスによれば、最高の類 (*γενικώτατον*, genus generalissimum) である。*** ゆえから、類或は種は、一般的に言えば、普遍は、事物ではなく、言葉であるという結論が生じる。アベラールは、範疇が言葉であることを證示する、このボエティウスの論據を、彼自身の『範疇論註釋』のなかにそのまま引用し、最高の類 (genus generalissimum) は vox であると繰返し力說している。**** それ故、普遍は諸事物を表示する vox であるという彼の唯名論は、かかるボエティウスの『範疇論註釋』に跡づけることができよう。

* "Namque (ut docuimus) non de rerum generibus, neque de rebus, sed de sermonibus reum genera significantibus in hoc opere tractatus habetur, hoc vero Aristoteles ipse declarat cum dicit : Eorum quae secundum nullam complexionem dicuntur, singulum aut substantiam significat, aut quantitatem. Quod si de rebus divisionem faceret, non dixisset significat ; res enim significatur, non ipsa significat." (Boethius, In Categorias Aristotelis Lib. I, PL. 64, 162 B)

** "Illud quoque maximo argumento est Aristotelem non de rebus, sed de sermonibus res significantibus speculare, quod ait : Singulum igitur eorum quae dicta sunt, ipsum quidem secundum se in nulla affirmatione dicitur, horum autem ad se invicem complexione affirmatio fit. Res enim si jungantur, affirmationem nullo modo perficiunt, affirmatio namque in oratione est. Quocirca si praedicamenta juncta faciunt affirmationem (affirmatio vero non nisi in oratione est, quae autem junguntur ut affirmatio fiat, hae sunt rerum significantes voces) praedicamentorum tractatus non de rebus, sed de vocibus est ; male igitur vel de rebus vel rerum generibus inscripserunt." (Op. cit. 162 BC)

*** Porphyrius, Op. cit. ed. Busse, p. 4

**** Abelard, Die Glossen zu den Kategorien, Prooemium, ed. Geyer, pp. 111-117

次に、アベラールが、かかる唯名論にいかに徹しているかを、『命題論』第七章「事物のうちの或るものは普遍的であり、或るものは個別的である (*Ἐπεὶ δέ ἐστι τὰ μὲν καθόλου τῶν πραγμάτων τὰ δὲ καθ' ἕκαστον.....*)」の解釋のうちに見よう。後にトマスは、これを典據として、實在論を展開しているが、* アベラールは、逆に、この箇所をも唯名論的に解釋する。即ち、ボエティウスのラテン譯では、Quoniam autem haec quidem rerum universalia, illa vero

singularia となつているが、ここの haec rerum に nomina を補え、というのである。そうすると、「諸事物の名稱のなかで或るものは普遍的であり、或るものは個別的である」ということになる。** ボエティウスは、魂のうちに把持される概念を一つの質とし、その或るものは普遍的であり、或るものは個別的である、というようにここを解しているから、*** アベラールの解釋は、ボエティウスの範疇論解釋を、ボエティウスを離れて、『命題論』にまで首尾一貫させたものと言えよう。

同じような見解は、ポルフィリウスの問題の解決のうちにも現われている。アベラールは、「類や種は實在するか、それとも單に思考のうちにのみ存するか」というポルフィリウスの第一の問題を、「類や種は、眞に存在するものを表示するか、それとも、キイマエラや山羊鹿の如き名稱のように、空虛な思いなしのうちにのみ存するか」という意味に解し、これに對して、個別的な名稱が表示するのと同じ實在を表示する、それ故、實在し、單に空虛な思いなしのうちにのみあるのではない、と答える。*** 卽ち、「類や種は實在するか」は、「實在しているものを表示するか」ということであるとし、先に、この問題を解決する爲の準備としてまとめられた自己の普遍論から、「實在しているものを表示する、それ故、實在する」と答えるのである。

* Thomas Aquinas, In Peri Hermeneias, lect. 10, ed. Spiazzi, nn. 121–122.

** "Et hoc est: Haec rerum, 'nomina' subaudis," (Abaelard, Die Glossen zu Peri Hermeneias, ed. Geyer, p. 401)

*** "Atque ideo cum aliquid vel affirmare cupimus vel negare, hoc ad intellectus et conceptionis animi qualitatem refertur. Videmus namque alias esse in rebus hujusmodi qualitates, quae in aliam convenire non possunt, nisi in unam quamcunque particularem singularemque substantiam: alia est enim qualitas singularis, ut Platonis vel Socratis, alia est quae communicata cum pluribus totam se singulis et omnibus praebet, ut est ipsa humanitas. Est enim quaedam hujusmodi qualitas, quae et in singulis tota sit, et in omnibus tota." (Boethius, In librum de interpretatione editio secunda, PL. 64. 462 CD)

**** "Prima itaque huiusmodi erat, utrum genera et species subsistant, id est significent aliqua vere existentia, an sint posita

in intellectu solo etc., id est sint posita in opinione cassa sine re, sicut haec nomina chimaera, hircocervus, quae sanam intelligentiam non generant. Ad quod respondendum est, quia re vera significant per nominationem res vere existentes, easdem scilicet quas singularia nomina, et nullo modo in opinione cassa sunt posita." (Abaelard, Logica 'Ingredientibus' Die Glossen zu Porphyrius, pp. 27-28)

次に、アベラールの狀態說を、ボエティウスの『イサゴーゲ註釋』に跡づけて、考察することとしよう。ポルフィリウスが三つの問題を提起している『イサゴーゲ』序說に對するボエティウスの註釋を見ると、ボエティウス自身、ここで特にアリストテレスの考を是認するからではなく、この書がアリストテレスの『範疇論』の入門書であるという理由で、アリストテレスの考に從い、ポルフィリウスの問題に對して、一つの答を與えている。それは、次のようなものである。

個々のものから收集された、個々のものの類似が、魂によつて思考され、充分に見られると種が生じ、樣々の種の類似が思考されると類が生じる。從つて、種とは、數的に類似しない個々のものの實體的類似から得られた概念に外ならず、類とは、諸々の種の間の類似から得られた概念に他ならない。この類似は、個々のもののうちにおいては可感的であり、普遍的なもののうちにおいては可知的である。同樣にして、可感的である時には、個々のものの內に存續し、思惟される時は普遍的となる、卽ち、類、種となるのである。それ故、類や種は可感的なもののうちに實在する。しかし、物體から分離したものとして思惟される。*

要するに、ボエティウスによれば、類とか種とか言われるものは、個々のものが他のものと共有している、他のものとの類似——それは、個々のもののうちにおいて可感的な樣態で實在し、個々のものを離れては現實に存在し得ない——が我々の知性の働によつて、個々のものから引離され、可知的で普遍的となつたものである。

ところで、以上のことから明らかな如く、思惟されている個々の事物相互の類似、卽ち、類や種は、事物のうちに

おいてのあり方と異つたあり方にある。すると類や種の如き概念は、空虛な概念ではないか。これに對して、ボエティウスは次のように答える。

我々は、物體から分離して獨立に存在し得ない線を、精神によつて物體から引離して把握するが、その際、決して僞の線を考えてはいない。けだし、事物の存在樣態とは別樣にある思念（intellectus）が、全て虛僞であるのではなくて、人間と馬とを結合して、半分人間であり半分馬である怪物を考える場合の如くに、事實上結合されていないものを結合する思念のみが虛僞であるから。諸事物のうちにあるものを分割し抽象して、獨立に取り出す思念は、決して虛僞ではなく、寧ろ、かかる思念のみが事物の固有性を見出し得るのである。類や種は、それ故、可感的なもののうちにあるが、可感的なものから引離され、獨立に思惟されるのは、可感的なものの本性、固有性が充分に把握されんが爲である。**

さて、以上が、ポルフィリウスの問題に對する解答という形で展開されているボエティウスの普遍論であるが、我々の魂の外において、諸事物のうちに可感的な狀態で存在する諸事物相互の類似が、類概念や種概念の實在的基盤であるという考は、アベラールの狀態說の原型であるように思われる。個々の諸事物のうちにある類似をアベラールは、共通的な「狀態」という言葉で表現し、ギヨーム批判を通して、先に述べた如くに、明白にしていつたと考えることができよう。***

* "Quocirca cum et genera et species cogitantur, tunc ex singulis in quibus sunt eorum similitudo colligitur, ut ex singulis hominibus inter se dissimilibus humanitatis similitudo, quae similitudo cogitata animo veraciterque perspecta fit species, quarum specierum rursus diversarum considerata similitudo, quae nisi in ipsis speciebus aut in earum individuis esse non potest, efficit genus, itaque haec sunt quidem in singularibus. Cogitantur vero universalia, nihilque aliud species esse putanda est, nisi cogitatio collecta ex individuorum dissimilium numero substantiali similitudine, genus vero cogitatio collecta ex specierum similitudine. Sed haec similitudo cum in singularibus est, fit sensibilis : cum in universalibus,

fit intelligibilis; eodemque modo cum sensibilis est, in singularibus permanet, cum intelligitur, fit universalis. Subsistunt ergo circa sensibilia, intelliguntur autem praeter corpora." (Boethius, In Porphy., PL. 64, 85 BC)

** "Nemo ergo dicat falsam nos lineam cogitare, quoniam ita eam mente capimus quasi praeter corpora sit, cum praeter corpora esse non possit. Non enim omnis qui ex subjectis rebus capitur intellectus aliter quam sese ipsae res habent, falsus esse putandus est, sed ille quidem qui hoc in compositione facit falsus est, ut cum hominem atque equum jungens putat esse centaurum. Qui vero id in divisionibus et abstractionibus atque assumptibus ab his rebus in quibus sunt efficit, non modo falsus non est, verum etiam solus intellectus id quod in proprietate verum est invenire potest. Sunt igitur hujusmodi res in corporalibus atque in sensibilibus rebus. Intelliguntur autem praeter sensibilia, ut eorum natura perspici et proprietas valeat comprehendi." (Op. cit, 85 AB)

ここで intellectus を「思念」と譯したのは、「概念」「思惟」兩方の意味で用いられているからである。

*** 更に又、事物のあり方とは別様にある思惟或は思念は、必ずしも空虛ではないというボエティウスの見解は、アベラールの下において「事物の存在様態は、それが思惟される様態と同じではない」という命題を生み、十三世紀の盛期スコラにまでうけ繼がれていつたと言えよう。

最後に、アベラールが、普遍的な言葉によつて共通的概念が表示されることを、諸々の權威によつて保證する際に、プラトーを擁護し、アリストテレスの見解と一致させんとして提出した、彼獨自の解釋を吟味し、歴史的に考察してみることにしよう。

先に述べた如く、アベラールは、普遍的な名稱によつて表示される、從つて、一種の轉用によつて普遍的と言われる、動物という本性を、アリストテレスは、常に可感的なもののうちにおいて存在すると考えたが、それは、この本性を現實的に考察したからであつた、これに對して、プラトーは、この本性が可感的なものから分離し、それ自體において本性的に自立すると主張するが、これは、アリストテレスがその現實に關して否定したところのものを、本性的な適應性 (aptitudo) という觀點から認める、ということによるのである、として、兩者の調和を計つた。プラトーをかく解して、その見解が何らアリストテレスの見解と矛盾しないとする以上、アベラール自身が、個體のうちに

現實的に存在する動物という本性――それは、普遍的な名稱によつて表示されるが故に、一種の轉用によつて普遍的と言われる、そして、それに則して共通的原因たる事物の「狀態」が取得される――に、それが個體のうちにおいて有する存在から獨立した、それ以前の何らかの存在を認めていたと言わなければならぬ。

このことは、彼がポルフィリウスの提出した第三の問題に對して與えた解決を考察すれば、明らかである。即ち、ポルフィリウスの第三の問題とは、普遍は、非物體的なものであるとすると、可感的なもののうちにあるか、それとも、可感的なものから分離して存在するか、というのであつたが、これに對して、アベラールは次のように答えている。

つまり、「普遍は、可感的なもののうちに存在する、即ち、可感的な事物のうちに存在する內的な實體を外的な諸形相によつて表示する。そして、可感的な事物のうちに現實的に存在するこの實體を表示すると同時に、既に上にプラトーに從つて論じられた如くに、可感的な事物から本性的に分離したこの同じ實體を證示する。それ故に、類や種は可感的なものうちにあり得るか、と問われるならば、その或るものは可感的な事物のうちにある、と答えられる。しかしながら、その場合、感性を離れても、本性的に永存するようにして。*」

ここにおいて、アベラールが、一種の轉用によつて普遍的とも言われる本性、可感的諸事物のうちに存する可感的諸事物相互の類似たる事物の「狀態」がそれに則して取得される本性を、單に可感的諸事物のうちに認めていたのみならず、可感的諸事物に本性的、自然的に先立ち、それ自體自存するものとしても考えていたことは明らかである。これは、後に用いられるようになつた言葉で言えば、普遍は ante rem であるという考である。或は又、これをアベラールのプラトニズムと呼ぶこともできよう。

* "Et dicuntur universalia subsistere in sensibilibus, id est significare intrinsecam substantiam existentem in re sensibili ex exterioribus formis et cum eam substantiam significent, quae actualiter subsistit in re sensibili, eandem tamen naturaliter

separatam a re sensibili demonstrant, sicut superius juxta Platonem determinavimus.....Unde merito quaerebatur, an umquam possent in sensibilibus esse; et respondetur de quibusdam quod sint, sic tamen, ut praeter sensualitatem, sicut dictum est, naturaliter permaneant." (Op. cit. p. 29)

さて、かかる思想の直接的淵源を求めれば、我々は、やはり、ポルフィリウスの『イサゴーゲ』、及び、それに對するボエティウスの註釋に至らなければならぬように思われる。

『イサゴーゲ』のうちに、普遍は ante rem であるという考が現われているところは隨所に見受けられるが、最も明らかなものとして、次のようなものをあげることができよう。卽ち、類は附帶有 (συμβεβηκός) よりより先なるもの (πρότερον) であることを論證する際に、ポルフィリウスは、附帶有は主に個體のうちにある、ところが類や種は本性的に個體的實體に先立つ (τὰ δὲ γένη τὰ εἴδη φύσει πρότερα τῶν ἀτόμων οὐσιῶν)、それ故、類は附帶有に先立つ、と論じている。* 又、類と種の共通性に關して、類と種に共通することは、それらが述語づけられるところのものよりも、より先なるものである、ということである (κοινὸν δὲ αὐτοῖς καὶ τὸ προτέροις εἶναι ὧν κατηγορεῖται)、とも言つている。** 更に、類と種の相違に關して、類は本性的に種に先立つ (ἔθεν καὶ πρότερα τῇ φύσει τὰ γένη) という言葉も見出される。*** これは、より普遍的なるもの程、本性的により先なるものであるということである。

これらのなかで、「類や種は本性的に個體的實體に先立つ」というところに對して、ボエティウスは、次のように註釋している。卽ち、類は、それが述語づけられるところのものからその實體 (substantia) を取得するのではなく、その實體及び形相が、構成的種差によつてそこから完成されるところの、その根元より實體を取得するのである。從つて、類を種に分割する種差が取去られても類は消滅することなく、類を構成する、卽ち、類の形相及び定義を完成するところの諸々のものにおいて存續する。それ故、類は、種が消滅しても、その固有の實體で永存する。種と個體の關係も同樣である。種は上位の種差によつて形成されるのであり、より後なる個體によつて形成されるのではない

から。從つて、種は個體以前に自存する。ところで、附帶有は、それが附帶するところのもの（卽ち、個體）がなければ、あり得ない。それ故、類は附帶有に先立つ。****

以上において、類や種の如き普遍は個々の個物に先立つて自存するという考が、ボエティウスのうちにも見出されることは明らかである。これらがアベラールのプラトニズムの直接的淵源をなしているということができよう。もつとも、アベラール自身は、類や種の如き言葉と、それらによつて表示される本性を明白に區別し、類や種によつて表示される本性が個體に先立ち、それ自體自存すると考えるのである。しかし、ともかく、このような本性を認め、それにかかる先存性を與えるのは、直接的には、ポルフィリウスやボエティウスの、普遍は個體に本性的に先立つという考によると言わなければならぬであろう。

* Porphyrii Isagoge et in Aristotelis Categorias Commentarium, ed. Busse, p. 17, l. 8-10

** Op. cit. p. 15, l. 12-13.

*** Ibid. l. 18

**** "Sed meminisse debemus superius dictum esse genus non ex his sumere substantiam de quibus praedicatur, sed de eo potius quo differentiis constitutivis ejus substantia formaque perficitur. Itaqus si genus quidem divisivis differentiis interemptis non perimitur, sed manet in iis, quae ejus constitutivae sunt, quae ejus formam diffinitionemque perficiunt .....non est dubium quin genus etiam pereuntibus speciebus possit in propria permanere, substantia, ita de specie permanere substantiam idam de speciebus dictum sit. Species enim superioribus differentiis, non posteriorbus individuis, formantur. Quae cum ita sint, species quoque ante individua subsistunt: accidentia vero nisi sint quibus accidunt, esse non possunt: nullis vero prius accidunt quam individuis. (Boethius, In Porphy. Commentariorum, Lib. V. p. 146 BC)

以上をとりまとめ、アラベールの普遍論を全體的に考察するならば、アラベールを、簡單に、唯名論者とか實在論者であると規定することができないことは明らかであろう。普遍は vox significativa であるという點は唯名論者であるが、それに對應する事物の本性、及び、それに則して取得される事物の「狀態」を實在界に措定するところは實

在論者である。又、後に用いられるようになつたante rem, in re, post remという言葉を用いて、アベラールによれば、普遍はこのうちの何れであるかを問うならば、様々の仕方においてであるが、その何れでもあると答えねばならぬ。歴史的に見れば、これらの諸要素は全て、彼の先行者たるポルフィリウス、ボエティウスのうちに混然と含まれていた。アベラールはこれらの諸要素を、彼獨自の仕方で整理統合し、それぞれに、それぞれの位置を與えたのである。

しかしながら、特に彼の唯名論に着目してみれば、彼こそが、中世において言葉の世界に注目し、言葉を概念及び事物の領域から截然と區別して考察した最初の人であつたと言うことができよう。この着眼がポルフィリウス、ボエティウスの整理統合に根本的原理となつている。そして、この基本的態度が、學藝學部(facultas artium)のうちに存續發展して受繼がれ、十四世紀に至りTerministsの論理學として輝かしく開花したのである。かかる觀點から見れば、アベラールが特に唯名論者と言われることは、誠に至當であると言うことができよう。先には、彼の唯名論を表面に明らかに現われている源泉として、ボエティウスの『範疇論註釋』に跡づけたのであるが、尚、その背後には、言葉、概念、事物の三領域の明白な區別の上に成立つストアの論理學が存することを銘記しなければならぬ。彼の唯名論の成立課程は、尚、この方面から克明に追求されなければならぬであろう。

(了)

(筆者　京都大學文學部〔西洋中世哲學史〕大學院學生)

Abelard's Theory of Universals

by Tetsuo Yokoyama

This paper considers in the first place Abelard's theory of universals systematically, and then examines its various constituents from a historical point of view.

In his commentary on Porphyrius' Isagoge, Abelard, rejecting both William of Champeaux's realism that things are universals, and Roscelin's nominalism which maintains that universals are nothing more than sounds, reaches the conclusion that universals are *signifying words* (voces significativae). Universals as *signifying words*, according to Abelard, produce in our mind the intellection of universals, which is abstractive intellection, and whose object is the common conception of individual things. Abstractive intellection is not vacant, but conforms to *state of things* (status rei); for, when it looks only at this one among the qualities the nature has, it does not mean that it considers anything that is not in that nature, neither does it view that one separately considered as really separated. Therefore *state of things*, which Abelard says to be that in which all things contained in a species or genus agree, answers in reality to the object of this abstractive intellection, i. e., to the common conception of individual substances. Accordingly, universal word, which produces abstractive intellection, designates directly *state of things*, and through it, the individual things that agree in that *state*. Considered by itself, however, *state of things* has its own natural being (esse naturale), which is in its *naturalis aptitudo* separated from sensible bodies; Plato's theory is in this sense given justice to.

The source of Abelard's nominalism may be found in Boethius's commentary on Aristotle's Categoriae. For Boethius shows in this commentary that categories are not things, but words, while they are supreme genera according to Porphyrius. The realism of his *status*-theory may well be traced to Boethius' answer to the problems raised by Porphyrius; Boethius there thinks *similitude* in things, when abstracted from individuals, makes the conceptions of genus and species. Abelard's *state* seems to be the

development of what Boethius called *similitude*. And Abelard's Platonism, so to say, may probably be traced back to Porphyrius' Isagoge, which often treats universals as prior by nature to individuals.

To conclude, we cannot treat him merely as a nominalist or a realist, nor can we call his theory of universals simply Aristotelian or Platonic. His merit rather consists in his original synthesis based upon the clarification of those elements which are so vaguely or confusedly stated in the writings of Porphyrius and Boethius.